

竹田 和代 (学生)

遠藤 真弘・橋本 明政・小柳 仁 (心研外科)

12. 流出血管が肺動脈であった肺葉内肺分画症の1例

曾根 康之・寺岡 邦彦・金田 良夫・豊田 智里・武石 詢 (第1病理)

座長 梶田 昭 (第2病理)

13. 剖検において初めて脳ムコール症と診断しえた重症透析患者の2例

田中 好子・西川 恵・川島洋一郎・松村 治・水上 玖美・

久保 和雄・佐中 孜・詫摩 武英・杉野 信博 (第4内科)

14. Paraprotein が腎に沈着した8症例の解析

西川 恵・佐中 孜・菊地 典子・松村 治・水上 玖美・湯村 和子・

詫摩 武英・杉野 信博 (第4内科)

赤星 雅・溝口 秀昭 (第1内科)

豊田 充康・梶田 昭 (第2病理)

豊田 充康・梶田 昭 (第2病理)

15. アミロイドーシスと骨髄内形質細胞系

閉会の辞 西川 俊郎

1. 子宮頸部の florid mesonephric hyperplasia の1例

(産婦人科) 滝沢 憲・塩田 真理・

稲生由紀子・井口登美子・武田 佳彦

(病院病理) 平山 章

症例は71歳 G-6, P-6で水様帯下, 性器出血を主訴とし, 子宮口開大所見から子宮内膜癌を疑い子宮鏡, 子宮内膜診査切除を施行したが萎縮性変化を認めるのみであった。初診後3カ月に水様帯下の沈査細胞中に腺癌様細胞を認めたので, 卵管癌を疑い開腹したが内生殖器に肉眼診では異常を認めなかった。HE染色では, 正常な頸管腺の他に, これとは少し異なる腺管が, 頸管内膜より漿膜近くまで増生する所見を認めた。PAS染色では, 赤桃色に良く染色される頸管腺に対し, 増生している腺管は細胞膜がわずかに染色されるのみであった。増生組織は, 良く分化した単純腺管と未分化な細胞で被覆され軽度に乳頭状を呈する腺管の2つが区分された。CEAの免疫組織染色では, 前者は染色されないが, 後者は良く染色された。但し, 両方とも, 細胞異型は少なく浸潤像も認めなかった。以上より本症例は胎生期 Wolffian 管の遺残細胞に由来する florid mesonephric hyperplasia と考えた。

2. 耳下腺腫瘍の病理

(耳鼻咽喉科) 井上 敬子・

山本 信和・高橋 正紘・石井 哲夫

昭和57年1月から昭和62年4月までの5年4カ月間に当院耳鼻咽喉科で入院治療した耳下腺腫瘍患者35名について, 1972年のWHO分類に従って分類し, 代表

的な症例についてまとめた。35名中, 良性腫瘍は26名(74%)で, pleomorphic adenomaが14例(53%), adenolymphomaが5例, その他 epidermoid cyst, eosinophilic granuloma, hemangioma等が認められた。悪性腫瘍は9名(26%)で, mucoepidermoid tumorが5例, adenoid cystic carcinomaが1例, adenocarcinomaが2例, undifferentiated carcinomaが1例みられた。良性腫瘍では40~50歳代にピークがみられ, 悪性腫瘍では50歳代以上の高齢者に多くみられたが, 20歳代の男性2例で mucoepidermoid tumorがみられた。pleomorphic adenoma, adenolymphoma, mucoepidermoid tumor, adenoidcystic carcinomaの症例について臨床経過と治療, 予後, 病理組織についてまとめた。

3. 核内封入体が認められた所謂肺硬化性血管腫の1例

(病院病理科) 相羽 元彦・平山 章

(第2外科) 鈴木 忠

所謂肺硬化性血管腫は, distinct clinicopathological entityであるが, その histogenesis は未だ定説に至っていない。核内封入体が認められた1症例について, 免疫組織化学的に検討した。症例は45歳の女性で, 15年前より follow されていた右下肺野の異常陰影に増大傾向が出てきたため右下葉切除された。4×3×4.5 cmの境界明瞭な結節で, 組織学的には, 充実性・乳頭状・出血性・硬化性の4 patternを認めた。封入体自身は α_1 -antitrypsin (AT)のみ陽性であったが, 封入体を有する細胞は裂隙状の腔や乳頭状の増生部の表面に